

# 『入菩提行論細疏』第九章をめぐって

九州大学 粱 見弘

式も丁出でさざみじにね音さき封ひあふ。これ御まきよさ入の中心に來てか……」。中の式音「さ  
入の飛せゆるすま諸す口の塞な刻の食自「おやーセニサ」(E. T.)……。おはいよで  
せま諸す便地難テ口可。大も丁出でさざみじにね音。これもさすま諸す中心に來て、空の空を  
このうしもく容内本としのけ。」……。おさすさゆるすばる人選さ(lsm)の選むの  
。さりて「街塔寺藏」のさ

## 一 はじめに

『入菩提行論細疏』*Bodhicaryāvatāra -pañjikā* は、十章からなる『入菩提行論』*Bodhicaryāvatāra*<sup>1</sup> に対する注釈書である。『入菩提行論』の原名 *Bodhicaryāvatāra*<sup>2</sup> は、「悟り (bodhi 菩提) のための実践 (caryā 行) へ入ること (avatāra 入)」を意味しており<sup>3</sup>、この書は仏の完全な悟りを得ようとした菩薩の誓願、およびその誓願を果たすための菩提行つまり「六つの完成」（六波羅蜜）を語るものである。

秀麗な韻文で構成された『入菩提行論』は、八世紀前半<sup>4</sup> にインド Nālandā 寺院で活躍した僧侶、Śāntideva (寂天) の主著である。彼はこの書の中で、中觀学派の空思想の真理を論究し、また布施・

<sup>1</sup> 本書には二種の伝承本が現存する。すなわち、全十章からなり、約 900 詩頌を含むサンスクリット本（そのチベット訳本が現行のチベット大藏經の中に収められている）と、全九章からなり、約 700 詩頌を含むチベット訳本として敦煌出土文献の中にのみ残っているものとである。九章立ての敦煌本の方が原作に近いことは、1980 年代以降、斎藤明教授を始めとする諸学者によって明らかにされつつある。

Cf. Akira Saito, "Śāntideva in the History of Mādhyamika Philosophy", in *Buddhism in India and Abroad*, ed. K.

Sankarnarayan, M. Yoritomi and S. A. Joshi (Mumbai: Somaiya Publications Pvt., 1996), p. 258.

<sup>2</sup> 『入菩提行論』*Bodhicaryāvatāra* という題名の他、『入菩薩行論』*Bodhisattvacaryāvatāra* という題名もある。斎藤明、「敦煌出土 アクシャヤマティ作『入菩薩行論』とその周辺」、『チベット仏教と社会』（春秋社、1986）pp. 108n43 を参照のこと。

<sup>3</sup> この語義解釈は Prajñākaramati の注釈に従ったもの。Cf. Louis de La Vallée Poussin, *Prajñākaramati's Commentary to the Bodhicaryāvatāra of Śāntideva*, Bibliotheca Indica (Calcutta: Asiatic Society of Bengal, 1901), p. 421, II. 3-4, p. 385, II. 19-20. (以下、Louis de La Vallée Poussin の校訂本を BCAP と称する。) また、Crosby 氏と Skilton 氏は "Undertaking the Way to Awakening" と訳している。Cf. Kate Crosby and Andrew Skilton, *The Bodhicaryāvatāra / Śāntideva* (Oxford: Oxford University Press, 1996), p. xxx (introduction).

<sup>4</sup> Śāntideva の年代については諸説がある。塚本啓祥・松長有慶・磯田熙文編著、『梵語仏典の研究 III・論書篇』（平楽寺書店、1990）p.250n1 を参照されたい。

持戒等々の菩薩の徳目が日々の生活においてどのように実践されるべきかについても具体的に示している。おそらくそのためであろう、インドにおいても、チベットにおいても、この書が広く愛読され、数多くの注釈書、解説書ないし抜粋集が撰述された<sup>5</sup>。それらのうち、サンスクリットで現存する唯一の文献が、11世紀前後に活躍したインド人、Prajñākaramati が著した『入菩提行論細疏』（以下『細疏』と称する）である。

11世紀後半からインドやチベットにおいて重要視されたこの注釈書の中、思想的に最も重要な位置を占めているのは、第九章「知恵の完成」（般若波羅蜜）章である。この第九章は、20世紀の始め頃から学界においてすでに注目されてきが、1994年にオーストラリア国立大学の Peter. R. Oldmeadow によって初めて完全に英訳された<sup>6</sup>。しかしその全訳には残念ながら、シノプシスが付されていない<sup>7</sup>。そこで本稿では、第九章全体のシノプシスを作成しその内容の全体を提示することとする。

シノプシスを示す前に、Oldmeadow 博士があまり論じていなかった Prajñākaramati の生涯、年代、思想的立場などについてここでまとめておこう<sup>8</sup>。

## 二 Prajñākaramati の生涯、年代と思想的立場

### I 生涯

Prajñākaramati の生涯に関しては、われわれは *Bule Annals* および Tārānāta の仏教史からわずかな資料を得るだけである。両者の記述によれば、彼は Vikramaśila 寺院の「六賢門」（六つの門を守護する六人の学者たち）の一人として活躍したと伝えられている。

*Bule Annals* においては、「六賢門」の名前を次のように挙げる。東門にあるのは、Śānti pa であり、南門にあるのは、Ngag gi dbang phyug grags pa (Vagisvarakirti) であり、西門にあるのは Shes rab 'byung gnas blo gros (Prajñākaramati) であり、北門にあるのは Nā ro paṇ chen (Nāro pa) であり、中央にあるのは

<sup>5</sup> この作品は漢訳されはしたが、訳文が晦渺難解などの理由により、中国仏教への影響はあまりなかった。斎藤明、「『入菩薩行論』の謎と諸問題——現行本第9「知恵の完成（般若波蜜）」章を中心として——」、『東方學』87(1994)、p. 147、釋如石、『入菩薩行 導論譯注』、修訂版（台北：藏海出版社、1994；初版、1991）序文 pp. II-III を参照されたい。

<sup>6</sup> Peter. R. Oldmeadow, "A Study of the Wisdom Chapter (Prajñāpāramitā Pariccheda) of the Bodhicaryāvatārapañjikā of Prajñākaramati", Diss. Australian National University, 1994.

<sup>7</sup> 一部のシノプシス (BCAP pp. 342-410) は作成されたが、その分量は全体の四分の一にすぎない。

<sup>8</sup> 本稿の内容は筆者の博士論文、「『入菩提行論細疏』第九章の研究と和訳」（『細疏』第九章の日本語全訳を含む、2000年12月、九州大学へ提出）からのものである。

は Rin chen rdo rje (Ratnavajra) と Jñānaśrī とである、という<sup>9</sup>。

一方、Tāranāta の仏教史では次のように叙述している。「この [Canaka 王の] 時代に生まれた「六賢門」の中で、東門を守護する Ācārya Ratnākaraśānti の記述は別の箇所において知られている。南門を守護する Prajñākaramati は、すべての学問に精通し、文殊の顔を直接にご覧になった方である。[彼は] 異教徒と対論する時には、文殊の画像に対して供養することおよび祈りを行うことだけで、異教徒の質問を（彼が）述べるままに理解し、そしてその [質問の] 答えを与えるやり方 [も] 同時に [彼の] 心の中に現れたので、その後、[実際に異教徒と] 対論すると、[彼は] 当然勝利した、ということはよく知られている。Prajñākara という名の [部分] だけに対する誤解から、Prajñākaramati と Prajñākaragupta とが同一人として見なされる、こういう間違いもまたよくある。この [Prajñākaramati] が寺院に属す比丘であったのに対して、後者は優婆塞 (upāsaka) であった。このことは学者たちの間ではよく知られている。」<sup>10</sup> *Bule Annals* において Prajñākaramati が西門の守護者とされるのに対して、Tāranāta の仏教史では彼が南門の守護者とされる。この細部の相違を除けば、それらの記載から以下のことが得られる。つまり、彼は、

- (1) 僧侶であり<sup>11</sup>、
- (2) さまざまな学間に精通し、
- (3) 対論の才能に優れており、
- (4) Ratnākaraśānti や Jñānaśrīmitra と同時代の人物として、

<sup>9</sup> George N. Roerich, *The Blue Annals* (1st ed., Calcutta, 1949; 2nd ed., Delhi, 1976; reprint, Delhi: Motilal Banarsi Dass Publishers, 1979, 1988, parts I and II, bound in one), pp. 205-206 (頁はリプリント版による。)

<sup>10</sup> Cf. Antonius Schiefner, *Tāranātha's de Doctrinae Buddhicae in India Propagatione* (Petropoli, 1868; reprint, Tokyo: Suzuki Research Foundation, 1963), p. 178, II. 10-19 (頁はリプリント版による。)

de skabs su byung ba'i mkhas pa sgo drug las / shar sgo bsrung ba po slob dpon Ratnākaraśānti pa'i lo rgyus ni gzhan du shes par bya'o / lho sgo bsrung ba shes rab 'byung gnas blo gros ni / rig pa'i gnas thams cad la mkhas shing 'jam dpal gyi zhal mnong sum du gzigs pa / mu stegs dang rtsod pa'i tshe / 'jam dpal gyi bris sku zhig la mchod pa dang gsol btab mdzid' pa tsam gyis mu stegs kyi rtsod pa ji ltar zer du 'ong ba dang / de'i lan 'debs tshul gcig car thugs la shar nas slar brtsad pa'i tshe nges par rgyi ba zhig yod par grags so / shes rab 'byung gnas ces pa tsam gyi mtshan la 'khrul nas / sher 'byung blo gros dang / sher 'byung sbas pa gcig par 'dod pa'i 'khrul pa yang mang du snang / 'di ni rten dge slong yin la / sher 'byung sbas pa ni / dge bsnyen yin no zhes mkhas pa rnams la grags so //

同氏によるドイツ語訳も参照されたい。Antonius Schiefner, *Tāranātha's Geschichte des Buddhismus in India* (St. Petersburg, 1869; reprint, Tokyo: Suzuki Research Foundation, 1963), p. 235, II. 2-15. (頁はリプリント版による。)

<sup>11</sup> この点は、『細疏』第九章における奥書と一致。「以上で、『入菩提行論』における知恵の完成という章の注釈が終了した。これは学者比丘 (paññitabhikṣu) Prajñākaramati の著作である。」(BCAP p. 605)

- (5) Vikramaśila 寺院を中心に活躍し、  
(6) Ratnākaraśānti などと並んで、当時の仏教思想界を代表する重要な学者の一人であった。

また、彼に帰される作品は、*Bodhicaryāvatāra-pañjikā* の他、*Śisyalekha-vṛtti* および *Abhisamayālamkāra-vṛtti-piṇḍartha* があり<sup>12</sup>、そのうち、*Abhisamayālamkāra-vṛtti-piṇḍartha* は般若思想に関連する著作である<sup>13</sup>。

では、ここで言及された Vikramaśila 寺院はいったいどこにあるのか、どのような寺院であるのか。考古学に基づいて、R. Chaudhary は、Vikramaśila が現在インドの Bihar 州 Bhagalpur にある Antichak という遺跡であると報告している。彼によれば、それは八世紀の最後の十年間もしくは九世紀の最初の十年間に建てられ、時間の経つにつれて次第に十世紀頃に至ったときに、Nālandā との定期的な交流を持ちながら、当時東アジアの最も有名な仏教学の中心地の一つとなり、そこに集まった留学生は Nālandā よりも数が多く、すべての面において Nālandā をやや凌駕しており、Atīśa が住職となったときがそれのもつとも繁栄の時期であった、と言われている<sup>14</sup>。

なお、「六賢門」について、Chaudhary は、それは Vikramaśila 寺院には六つの門があることを意味する他、そこには六つの異なる仏教学分野もしくは仏教学院があり、六人の高名な仏教学者がそれらの担当者であることを示唆している、というように述べている<sup>15</sup>。

## II 年代

Prajñākaramati の年代について、学者たちの間では見解を異にしている。筆者は白寄説に従いたい。白寄顯成教授は、「Jitāri と Prajñākaramati — Jitāri の『有神論批判』——」<sup>16</sup> という論文において、先行

<sup>12</sup> Lama Chimpa and Alaka Chattopadhyaya, *Tāranātha's History of Buddhism in India* (Simla, 1970; reprint, Calcutta, 1990, Delhi: Motilal Banarsiādass Publishers, 1997), p. 295n14 (頁は1997年のリプリント版による。) 一方、David S. Ruegg, *The Literature of the Madhyamaka School of Philosophy in India*, in J. Gonda ed. *History of Indian Literature, Volume VII*, fasc. 1 (Wiesbaden: O. Harrassowitz, 1981), p. 116においては *Śisyalekha-vṛtti* という作品に言及していない。

<sup>13</sup> Ruegg (1981) p. 116 を参照。

<sup>14</sup> Radhakrishna Chaudhary, *The University of Vikramaśila* (Bhagalpur: Bihar Research Society, 1975), p. 2, p. 6, p. 15 を参照。また、Vikramaśila の表記の問題 (Vikramaśila か Vikramāśilā かなど) に関しては、Chaudhary (1975) pp. 8-13 の他、Alaka Chattopadhyaya, *Atīśa and Tibet: life and works of Dipamkara Śrījñāna in relation to the history and religion of Tibet* (Calcutta, 1967; reprint, Delhi: Motilal Banarsiādass Publishers, 1981), pp. 102-105 (頁はリプリント版による) も参照されたい。

<sup>15</sup> Chaudhary (1975) pp. 1-2, 6, 15-16 を見よ。

<sup>16</sup> 白寄顯成、「Jitāri と Prajñākaramati — Jitāri の『有神論批判』——」、『密教文化』152(1985), pp. 74-96 を参照。

した諸説を検討・批判した上で、神の慈悲の問題を取り上げて、Prajñākaramati の『細疏』における議論内容と Jitāri の *Sugatamatavibhaṅgabhaśya* 『善逝本宗分別論注釈』における議論内容とを比較した。その結果、神の慈悲の問題をめぐる両者の議論内容はきわめて対応しており、しかも Jitāri のものよりも、Prajñākaramati のものの方がよく整理されている。従って、Prajñākaramati が Jitāri のものに依拠したとするならば、彼は Jitāri と同時代人<sup>17</sup>か、彼より後の人と言える。逆に、たとえ Jitāri が Prajñākaramati のものに依拠したとしても、『細疏』の中に 10 世紀の人物である Āryadeva の詩頌を引用しているから<sup>18</sup>、彼は 10 世紀頃の人物と言える。いずれにせよ、Prajñākaramati は 10 世紀から 11 世紀にかけて活躍した思想家である、という<sup>19</sup>。

### III 思想的立場

周知のように、世俗真理に関する思想的立場の相違から、中觀学派は帰謬論証派、經（量部）中觀派と瑜伽行中觀派との三つの分派に分けられる。『細疏』第九章の中で、経量部や唯識学派への批判が行われたことから、Prajñākaramati が中觀学派の学者であることは疑う余地がない。しかし中觀のどの分派に属するかは未だに確認できない<sup>20</sup>。彼をおよそ帰謬論証派の一人として見ている学者もいるが<sup>21</sup>、それはおそらくチベットの伝承によるものであって、思想内容の吟味に基づくものではない。筆者は、『細疏』第九章において、Prajñākaramati が勝義真理の次元でも世俗真理の次元でも自己認識を認めず、また経量部の「知が対象の形象をもち対象の後に生じる」という説を批判している点から、彼はいわゆる瑜伽行中觀派に所属することはなく、經（量）部中觀派に所属することもないと結論づけた<sup>22</sup>。その結果、彼の認識論の内容から見れば、彼の所属する学派としては帰謬論証派がもっとも可能

<sup>17</sup> Jitāri の活動年代について、諸説あるが、ほとんどの場合、彼を 10 世紀後半から 11 世紀前半の範囲内においている。そのうち、白嶽教授は 960-1040 A. D. 説を提出した。塙本啓祥・松長有慶・磯田熙文編著 (1990) p. 295n107 を参照。

<sup>18</sup> 『細疏』の中に、10 世紀の人物と想定されている Āryadeva による *Jñānasārasamuccaya* 『智心髓集』の第 28 詩節が引用され、これは 10 世紀後半の Jitāri の *Sugatamatavibhaṅgakārikā* 『善逝本宗分別論詩頌』の詩節 8 にも対応している。BCAP p. 359, II. 10-11 を見よ。

<sup>19</sup> 白嶽 (1985) pp. 78-80 を見よ。

<sup>20</sup> 梶山雄一、「中觀思想の歴史と文献」、『講座大乗仏教 7・中觀思想』（春秋社、1982）pp. 17-18においてすでに指摘されている。

<sup>21</sup> たとえば、Ruegg (1981) p. 85n278、Paul Williams, *The Reflexive Nature of Awareness: A Tibetan Madhyamaka Defence* (Surrey: Curzon Press, 1998), p. 39, 48などを参照。

<sup>22</sup> 拙稿、「唯識思想をめぐる Prajñākaramati の世俗の立場——『入菩提行論細疏』第九章を中心に——」、『イン

性が高いのではないかと思われる。ただし、彼の思想の中には、帰謬論証派の創始者と言われるチャンドラキルティ (Candrakīrti) の見解と異なる要素も見られる。たとえば、仏となることの妨げである「所知障」<sup>23</sup> の理解など<sup>24</sup> に関する二人の見解は一致していない。それ故に、Prajñākaramati の思想的立場を完全に確認するためには、彼の思想における他の帰謬論証派的な特徴、つまり論理学などに対する彼の考え方をさらに検証する必要があるだろう。

### 三 第九章の内容要約

『入菩提行論』第九章の内容は、その題名通りに、「知恵の完成」（般若波羅蜜）を語るものである。その「知恵」は中觀学派の術語で言えば、空性 (śūnyatā) に関する知恵である。存在物は互いに依存しあって、自立的に存在しないが故に、固定的かつ不变的な実体を持たない。これは、空性そのものであり、聖者が認識している「勝義真理」（勝義諦、最高の目的としての真理）とも言われる。一方、同じ存在物を見る場合、凡夫はそれを実体のある真実在として誤って認識している。このような誤って把握されている真实在が「世俗真理」（世俗諦）と呼ばれる。

こうして、同じ対象を認識していても、認識主体の相違によって、異なる認識結果が得られる。それがいわゆる「二真理説」（二諦説）であり<sup>25</sup>、中觀学説の中核思想とも言える。『入菩提行論』第九章はまさにこの「二真理説」をテーマとしたものである。170 に近い詩頌からなるこの章の内容を一言で言うならば、中觀学派の「二真理説」に対する釈明に他ならない。

Prajñākaramati の『細疏』の説明によれば、『入菩提行論』第九章の内容は次のようにまとめられる。詩頌 1 から詩頌 5 までは、二真理説の要約である。詩頌 6 以下は、二真理説をめぐる、仏教内部諸学派との対論、ならびに仏教外部諸学派との対論である。詩頌 1 ではまず、第八章までに述べられた他の五つの完成は「知恵の完成」を獲得するための手段であり、苦しみの停止を望む人はこの「知恵の完成」を目指して前進すべきである、と明言している。詩頌 2 においては、真理は二種類あり、「勝義真理」

ドの文化と論理 戸崎宏正博士古稀記念論文集』（九州大学出版会、2000）pp. 487-513 を参照されたい。

<sup>23</sup> 拙稿、「『入菩提行論細疏』における所知障の覚え書き」、『西日本宗教学雑誌』19 (1997) pp. 82-92 を参照されたい。

<sup>24</sup> 他に、たとえば、四不生の「無因」(ahetu) について (BCAP p. 540, II. 10-p. 574, II. 2.)、Prajñākaramati の解釈は Candrakīrti のものと相違している。田村智淳、「プラジュニヤカラマティの有神論批判」、『南都佛教』27 (1971) p. 2 を参照のこと。

<sup>25</sup> 以上の説明は「二真理説」に対する最も基本的な定義である。中觀思想の中に展開されている二真理説は、実際はより豊富であり、複雑な関係を持っている。『細疏』における「二真理説」については、拙稿、「世俗知の二重構造について」、『印度學佛教學研究』45, No. 2 (1997) pp. 874-876 を参照されたい。

と「世俗真理」とである、と示している。勝義真理の認識は、認識主体と認識対象という主客関係を持たず、あらゆる概念作用や言語活動を超越したものである。それに対して、世俗真理の認識は、主客関係をもち、概念作用などの領域にとどまっている、と言う。次に、詩頌3から詩頌5までは、勝義真理を見ているヨーギン（yogin、修行者の意）たち、すなわち聖者たちの間にはさらに、知恵の相違によって上下に分けられ、下位にいる者が上位にいる者によって否定される。他方、存在物には実在する本質があると誤って見ている通常人たちは、存在物を幻のように見ているヨーギンたちと見解を異にしている、と言う。この項の人物と書かれているのは、Prajñākaramati が 10世紀か、『中論疏』内に記載された三

以上のように示したあと、詩頌6から詩頌151まで、「二真理説」<sup>26</sup>をめぐるさまざまな対論が展開される。そこに登場している対論者たちは、『細疏』によれば、五蘊などが実有であると認める経量部を始めとし、認識が実有であると説く唯識論者、自我があると主張するアートマン論者、因果関係はないと唱える自然論者、神が世界の創造者であると考える有神論者、存在物は原子に由来すると提唱する原子論者、ないし一切の源は根本原質であると語る根本原質論者等々である。彼らとの議論を繰り返したあと、もろもろの原因から生じてきた存在物はいかなる実体も持たず、空であり、最初から不生不滅である、と結論付けられる。ここまでで、Nāgārjunaの『中論』以来、中觀学派において最も重要視されている空性の思想が立証される。そして詩頌152以降は、『入菩提行論』の作者による結びとしての祈願がなされる<sup>27</sup>。以上で、第九章「知恵の完成」章が終了する。

#### 四 シノプシス

『細疏』第九章全体の構造をさらに詳細に整理すれば、下記のようなシノプシスが得られる。右側に示される五桁の数字は、Louis de La Vallée Poussinの校訂本のページ数（上三桁）と行数（下二桁）に従い、それに始まる一段落を表す。たとえば50402は、504ページ2行目以下の一段落の意。また、このシノプシスは、出来る限り Prajñākaramati の解釈に従うものとしたい。ただし、彼の意図が明瞭でない場合は、前後の文脈を考察した上で、筆者なりの理解・判断を示した。

<sup>26</sup> あるいは「空性説」とも言える。この「すべてが空である」ことを立証するために、仏教伝統における「四つの念想法」（四念處、四念住）が用いられる。

<sup>27</sup> 最後の詩節を注釈したあと、注釈者 Prajñākaramati による廻向文も付されている。

0. 始めに：事物は「り（不純）」である (ver. 1-6ab) 52705-52816 通釋 3  
 1. 写本製作者による帰敬句 (14-19v) 菩提さるふき典釋 34201 錄釋問 1 3  
 2. 注釈者による帰敬偈 うりえないすことにつき(特-別-解-説) 34202-34306 大註 3  
 3. 前の章とのつながり う見えないすことについて (vers. 109-116) 34307-34401 錄釋 3
- I. 真理を吟味弁別する知恵の重要性 (ver. 1) まじめが樂旨さうこひ式註 34402-35202 空 1 3
- II. 二種の真理と二種の世間 (vers. 2-5) (da81-84 .219v) 立説 35113-37411 俗 1 3
- III. 幻をめぐる対論 (201) 対論者との対論 (vers. 117-118) (et-b081 .219v) おもての樂旨 1 3
1. 蘊・処・界の実在性を中心に (vers. 6-8) (et-b02 .219v) 人取さるふき書 37412-37916 通ト 3  
 2. 罪福、再生、涅槃の成立を中心に (vers. 9-14) おもての樂旨不 38001-38913 おもての空 3  
 3. 識（心）の実在性を中心に おととの樂論 (vers. 127cd-138) (et-ge01) 錄釋問 1 3  
 3. 1 幻（対象）と迷乱（識）との認識関係 うる空性の考察の真偽性 菩提さるふき  
   3. 1. 1 問題提起 (vers. 15-17ab) (et-ge12 .219v) 益詳さるふき 38914-39107 3  
   3. 1. 2 自己認識批判 のは原因が(21-22v) おもての樂旨さうこひ式註 1 3  
   3. 1. 2. 1 行為要素の側面から (vers. 17cd-23) 39108-39910 おへ説釋自 3  
   3. 1. 2. 2 想起の側面から (ver. 24) (et-ge22 .219v) 39911-40215 おもての樂旨 1  
   3. 1. 2. 3 他心知の側面から (ver. 25) 六品 おもての樂旨さうこひ式註 1 3  
   3. 1. 2. 4 傍論：直接に経験されたもの等がなくなることに関して  
     3. 1. 2. 4. 1 異論 (ver. 26) うもむじない(通説法) 40402-40609 おもての樂旨 3  
     3. 1. 2. 4. 2 四つの選択肢による否定 (vers. 27-28ab) (通説法) 40610-40803 トマヤ  
     3. 1. 2 心と輪廻との関係 (vers. 28cd-29ab) (通説法) 40804-41003 おもての樂旨 3  
 4. 煩惱の除去を中心に (vers. 132-165) (et-ge01 .219v) おもての樂旨 1 3  
   4. 1 唯識説の場合の誤謬 (vers. 29cd-30cd) (et-ge02 .219v) 41004-41112 おもての樂旨 3  
   4. 2 中観説の場合 (vers. 167-168) (et-ge03 .219v) 41113-41119 おもての樂旨 3  
     4. 2. 1 問題提起 (ver. 31ab) (et-ge04 .219v) 41113-41119 おもての樂旨 3  
     4. 2. 2 回答：潜在印象の除去の段階 (vers. 31cd-35) (通説法) 41201-41805 おもての樂旨 3  
 5. 涅槃した仏を中心に  
   5. 1 衆生への利益の実現 (vers. 36-38) (et-ge05 .219v) 容格不の毫 41806-42119 おもての樂旨 3  
   5. 2 佛への供養の福德の可能性 (et-ge06 .219v) 42201-42208 おもての樂旨 3  
     5. 2. 1 問題提起 (ver. 39ab) (et-ge07 .219v) 42201-42208 おもての樂旨 3  
     5. 2. 2 教証による釈明 (vers. 39cd-40) (et-ge08 .219v) 42209-42511 おもての樂旨 3  
       5. 2. 2. 1 おもての樂旨 3  
       5. 2. 2. 2 おもての樂旨 3  
       5. 2. 2. 3 おもての樂旨 3  
       5. 2. 2. 4 おもての樂旨 3  
       5. 2. 2. 5 おもての樂旨 3  
       5. 2. 2. 6 おもての樂旨 3  
       5. 2. 2. 7 おもての樂旨 3  
       5. 2. 2. 8 おもての樂旨 3  
       5. 2. 2. 9 おもての樂旨 3  
       5. 2. 2. 10 おもての樂旨 3  
       5. 2. 2. 11 おもての樂旨 3  
       5. 2. 2. 12 おもての樂旨 3  
       5. 2. 2. 13 おもての樂旨 3  
       5. 2. 2. 14 おもての樂旨 3  
       5. 2. 2. 15 おもての樂旨 3  
       5. 2. 2. 16 おもての樂旨 3  
       5. 2. 2. 17 おもての樂旨 3  
       5. 2. 2. 18 おもての樂旨 3  
       5. 2. 2. 19 おもての樂旨 3  
       5. 2. 2. 20 おもての樂旨 3  
       5. 2. 2. 21 おもての樂旨 3  
       5. 2. 2. 22 おもての樂旨 3  
       5. 2. 2. 23 おもての樂旨 3  
       5. 2. 2. 24 おもての樂旨 3  
       5. 2. 2. 25 おもての樂旨 3  
       5. 2. 2. 26 おもての樂旨 3  
       5. 2. 2. 27 おもての樂旨 3  
       5. 2. 2. 28 おもての樂旨 3  
       5. 2. 2. 29 おもての樂旨 3  
       5. 2. 2. 30 おもての樂旨 3  
       5. 2. 2. 31 おもての樂旨 3  
       5. 2. 2. 32 おもての樂旨 3  
       5. 2. 2. 33 おもての樂旨 3  
       5. 2. 2. 34 おもての樂旨 3  
       5. 2. 2. 35 おもての樂旨 3  
       5. 2. 2. 36 おもての樂旨 3  
       5. 2. 2. 37 おもての樂旨 3  
       5. 2. 2. 38 おもての樂旨 3  
       5. 2. 2. 39 おもての樂旨 3  
       5. 2. 2. 40 おもての樂旨 3  
       5. 2. 2. 41 おもての樂旨 3  
       5. 2. 2. 42 おもての樂旨 3  
       5. 2. 2. 43 おもての樂旨 3  
       5. 2. 2. 44 おもての樂旨 3  
       5. 2. 2. 45 おもての樂旨 3  
       5. 2. 2. 46 おもての樂旨 3  
       5. 2. 2. 47 おもての樂旨 3  
       5. 2. 2. 48 おもての樂旨 3  
       5. 2. 2. 49 おもての樂旨 3  
       5. 2. 2. 50 おもての樂旨 3  
       5. 2. 2. 51 おもての樂旨 3  
       5. 2. 2. 52 おもての樂旨 3  
       5. 2. 2. 53 おもての樂旨 3  
       5. 2. 2. 54 おもての樂旨 3  
       5. 2. 2. 55 おもての樂旨 3  
       5. 2. 2. 56 おもての樂旨 3  
       5. 2. 2. 57 おもての樂旨 3  
       5. 2. 2. 58 おもての樂旨 3  
       5. 2. 2. 59 おもての樂旨 3  
       5. 2. 2. 60 おもての樂旨 3  
       5. 2. 2. 61 おもての樂旨 3  
       5. 2. 2. 62 おもての樂旨 3  
       5. 2. 2. 63 おもての樂旨 3  
       5. 2. 2. 64 おもての樂旨 3  
       5. 2. 2. 65 おもての樂旨 3  
       5. 2. 2. 66 おもての樂旨 3  
       5. 2. 2. 67 おもての樂旨 3  
       5. 2. 2. 68 おもての樂旨 3  
       5. 2. 2. 69 おもての樂旨 3  
       5. 2. 2. 70 おもての樂旨 3  
       5. 2. 2. 71 おもての樂旨 3  
       5. 2. 2. 72 おもての樂旨 3  
       5. 2. 2. 73 おもての樂旨 3  
       5. 2. 2. 74 おもての樂旨 3  
       5. 2. 2. 75 おもての樂旨 3  
       5. 2. 2. 76 おもての樂旨 3  
       5. 2. 2. 77 おもての樂旨 3  
       5. 2. 2. 78 おもての樂旨 3  
       5. 2. 2. 79 おもての樂旨 3  
       5. 2. 2. 80 おもての樂旨 3  
       5. 2. 2. 81 おもての樂旨 3  
       5. 2. 2. 82 おもての樂旨 3  
       5. 2. 2. 83 おもての樂旨 3  
       5. 2. 2. 84 おもての樂旨 3  
       5. 2. 2. 85 おもての樂旨 3  
       5. 2. 2. 86 おもての樂旨 3  
       5. 2. 2. 87 おもての樂旨 3  
       5. 2. 2. 88 おもての樂旨 3  
       5. 2. 2. 89 おもての樂旨 3  
       5. 2. 2. 90 おもての樂旨 3  
       5. 2. 2. 91 おもての樂旨 3  
       5. 2. 2. 92 おもての樂旨 3  
       5. 2. 2. 93 おもての樂旨 3  
       5. 2. 2. 94 おもての樂旨 3  
       5. 2. 2. 95 おもての樂旨 3  
       5. 2. 2. 96 おもての樂旨 3  
       5. 2. 2. 97 おもての樂旨 3  
       5. 2. 2. 98 おもての樂旨 3  
       5. 2. 2. 99 おもての樂旨 3  
       5. 2. 2. 100 おもての樂旨 3  
       5. 2. 2. 101 おもての樂旨 3  
       5. 2. 2. 102 おもての樂旨 3  
       5. 2. 2. 103 おもての樂旨 3  
       5. 2. 2. 104 おもての樂旨 3  
       5. 2. 2. 105 おもての樂旨 3  
       5. 2. 2. 106 おもての樂旨 3  
       5. 2. 2. 107 おもての樂旨 3  
       5. 2. 2. 108 おもての樂旨 3  
       5. 2. 2. 109 おもての樂旨 3  
       5. 2. 2. 110 おもての樂旨 3  
       5. 2. 2. 111 おもての樂旨 3  
       5. 2. 2. 112 おもての樂旨 3  
       5. 2. 2. 113 おもての樂旨 3  
       5. 2. 2. 114 おもての樂旨 3  
       5. 2. 2. 115 おもての樂旨 3  
       5. 2. 2. 116 おもての樂旨 3  
       5. 2. 2. 117 おもての樂旨 3  
       5. 2. 2. 118 おもての樂旨 3  
       5. 2. 2. 119 おもての樂旨 3  
       5. 2. 2. 120 おもての樂旨 3  
       5. 2. 2. 121 おもての樂旨 3  
       5. 2. 2. 122 おもての樂旨 3  
       5. 2. 2. 123 おもての樂旨 3  
       5. 2. 2. 124 おもての樂旨 3  
       5. 2. 2. 125 おもての樂旨 3  
       5. 2. 2. 126 おもての樂旨 3  
       5. 2. 2. 127 おもての樂旨 3  
       5. 2. 2. 128 おもての樂旨 3  
       5. 2. 2. 129 おもての樂旨 3  
       5. 2. 2. 130 おもての樂旨 3  
       5. 2. 2. 131 おもての樂旨 3  
       5. 2. 2. 132 おもての樂旨 3  
       5. 2. 2. 133 おもての樂旨 3  
       5. 2. 2. 134 おもての樂旨 3  
       5. 2. 2. 135 おもての樂旨 3  
       5. 2. 2. 136 おもての樂旨 3  
       5. 2. 2. 137 おもての樂旨 3  
       5. 2. 2. 138 おもての樂旨 3  
       5. 2. 2. 139 おもての樂旨 3  
       5. 2. 2. 140 おもての樂旨 3  
       5. 2. 2. 141 おもての樂旨 3  
       5. 2. 2. 142 おもての樂旨 3  
       5. 2. 2. 143 おもての樂旨 3  
       5. 2. 2. 144 おもての樂旨 3  
       5. 2. 2. 145 おもての樂旨 3  
       5. 2. 2. 146 おもての樂旨 3  
       5. 2. 2. 147 おもての樂旨 3  
       5. 2. 2. 148 おもての樂旨 3  
       5. 2. 2. 149 おもての樂旨 3  
       5. 2. 2. 150 おもての樂旨 3  
       5. 2. 2. 151 おもての樂旨 3  
       5. 2. 2. 152 おもての樂旨 3  
       5. 2. 2. 153 おもての樂旨 3  
       5. 2. 2. 154 おもての樂旨 3  
       5. 2. 2. 155 おもての樂旨 3  
       5. 2. 2. 156 おもての樂旨 3  
       5. 2. 2. 157 おもての樂旨 3  
       5. 2. 2. 158 おもての樂旨 3  
       5. 2. 2. 159 おもての樂旨 3  
       5. 2. 2. 160 おもての樂旨 3  
       5. 2. 2. 161 おもての樂旨 3  
       5. 2. 2. 162 おもての樂旨 3  
       5. 2. 2. 163 おもての樂旨 3  
       5. 2. 2. 164 おもての樂旨 3  
       5. 2. 2. 165 おもての樂旨 3  
       5. 2. 2. 166 おもての樂旨 3  
       5. 2. 2. 167 おもての樂旨 3  
       5. 2. 2. 168 おもての樂旨 3  
       5. 2. 2. 169 おもての樂旨 3  
       5. 2. 2. 170 おもての樂旨 3  
       5. 2. 2. 171 おもての樂旨 3  
       5. 2. 2. 172 おもての樂旨 3  
       5. 2. 2. 173 おもての樂旨 3  
       5. 2. 2. 174 おもての樂旨 3  
       5. 2. 2. 175 おもての樂旨 3  
       5. 2. 2. 176 おもての樂旨 3  
       5. 2. 2. 177 おもての樂旨 3  
       5. 2. 2. 178 おもての樂旨 3  
       5. 2. 2. 179 おもての樂旨 3  
       5. 2. 2. 180 おもての樂旨 3  
       5. 2. 2. 181 おもての樂旨 3  
       5. 2. 2. 182 おもての樂旨 3  
       5. 2. 2. 183 おもての樂旨 3  
       5. 2. 2. 184 おもての樂旨 3  
       5. 2. 2. 185 おもての樂旨 3  
       5. 2. 2. 186 おもての樂旨 3  
       5. 2. 2. 187 おもての樂旨 3  
       5. 2. 2. 188 おもての樂旨 3  
       5. 2. 2. 189 おもての樂旨 3  
       5. 2. 2. 190 おもての樂旨 3  
       5. 2. 2. 191 おもての樂旨 3  
       5. 2. 2. 192 おもての樂旨 3  
       5. 2. 2. 193 おもての樂旨 3  
       5. 2. 2. 194 おもての樂旨 3  
       5. 2. 2. 195 おもての樂旨 3  
       5. 2. 2. 196 おもての樂旨 3  
       5. 2. 2. 197 おもての樂旨 3  
       5. 2. 2. 198 おもての樂旨 3  
       5. 2. 2. 199 おもての樂旨 3  
       5. 2. 2. 200 おもての樂旨 3  
       5. 2. 2. 201 おもての樂旨 3  
       5. 2. 2. 202 おもての樂旨 3  
       5. 2. 2. 203 おもての樂旨 3  
       5. 2. 2. 204 おもての樂旨 3  
       5. 2. 2. 205 おもての樂旨 3  
       5. 2. 2. 206 おもての樂旨 3  
       5. 2. 2. 207 おもての樂旨 3  
       5. 2. 2. 208 おもての樂旨 3  
       5. 2. 2. 209 おもての樂旨 3  
       5. 2. 2. 210 おもての樂旨 3  
       5. 2. 2. 211 おもての樂旨 3  
       5. 2. 2. 212 おもての樂旨 3  
       5. 2. 2. 213 おもての樂旨 3  
       5. 2. 2. 214 おもての樂旨 3  
       5. 2. 2. 215 おもての樂旨 3  
       5. 2. 2. 216 おもての樂旨 3  
       5. 2. 2. 217 おもての樂旨 3  
       5. 2. 2. 218 おもての樂旨 3  
       5. 2. 2. 219 おもての樂旨 3  
       5. 2. 2. 220 おもての樂旨 3  
       5. 2. 2. 221 おもての樂旨 3  
       5. 2. 2. 222 おもての樂旨 3  
       5. 2. 2. 223 おもての樂旨 3  
       5. 2. 2. 224 おもての樂旨 3  
       5. 2. 2. 225 おもての樂旨 3  
       5. 2. 2. 226 おもての樂旨 3  
       5. 2. 2. 227 おもての樂旨 3  
       5. 2. 2. 228 おもての樂旨 3  
       5. 2. 2. 229 おもての樂旨 3  
       5. 2. 2. 230 おもての樂旨 3  
       5. 2. 2. 231 おもての樂旨 3  
       5. 2. 2. 232 おもての樂旨 3  
       5. 2. 2. 233 おもての樂旨 3  
       5. 2. 2. 234 おもての樂旨 3  
       5. 2. 2. 235 おもての樂旨 3  
       5. 2. 2. 236 おもての樂旨 3  
       5. 2. 2. 237 おもての樂旨 3  
       5. 2. 2. 238 おもての樂旨 3  
       5. 2. 2. 239 おもての樂旨 3  
       5. 2. 2. 240 おもての樂旨 3  
       5. 2. 2. 241 おもての樂旨 3  
       5. 2. 2. 242 おもての樂旨 3  
       5. 2. 2. 243 おもての樂旨 3  
       5. 2. 2. 244 おもての樂旨 3  
       5. 2. 2. 245 おもての樂旨 3  
       5. 2. 2. 246 おもての樂旨 3  
       5. 2. 2. 247 おもての樂旨 3  
       5. 2. 2. 248 おもての樂旨 3  
       5. 2. 2. 249 おもての樂旨 3  
       5. 2. 2. 250 おもての樂旨 3  
       5. 2. 2. 251 おもての樂旨 3  
       5. 2. 2. 252 おもての樂旨 3  
       5. 2. 2. 253 おもての樂旨 3  
       5. 2. 2. 254 おもての樂旨 3  
       5. 2. 2. 255 おもての樂旨 3  
       5. 2. 2. 256 おもての樂旨 3  
       5. 2. 2. 257 おもての樂旨 3  
       5. 2. 2. 258 おもての樂旨 3  
       5. 2. 2. 259 おもての樂旨 3  
       5. 2. 2. 260 おもての樂旨 3  
       5. 2. 2. 261 おもての樂旨 3  
       5. 2. 2. 262 おもての樂旨 3  
       5. 2. 2. 263 おもての樂旨 3  
       5. 2. 2. 264 おもての樂旨 3  
       5. 2. 2. 265 おもての樂旨 3  
       5. 2. 2. 266 おもての樂旨 3  
       5. 2. 2. 267 おもての樂旨 3  
       5. 2. 2. 268 おもての樂旨 3  
       5. 2. 2. 269 おもての樂旨 3  
       5. 2. 2. 270 おもての樂旨 3  
       5. 2. 2. 271 おもての樂旨 3  
       5. 2. 2. 272 おもての樂旨 3  
       5. 2. 2. 273 おもての樂旨 3  
       5. 2. 2. 274 おもての樂旨 3  
       5. 2. 2. 275 おもての樂旨 3  
       5. 2. 2. 276 おもての樂旨 3  
       5. 2. 2. 277 おもての樂旨 3  
       5. 2. 2. 278 おもての樂旨 3  
       5. 2. 2. 279 おもての樂旨 3  
       5. 2. 2. 280 おもての樂旨 3  
       5. 2. 2. 281 おもての樂旨 3  
       5. 2. 2. 282 おもての樂旨 3  
       5. 2. 2. 283 おもての樂旨 3  
       5. 2. 2. 284 おもての樂旨 3  
       5. 2. 2. 285 おもての樂旨 3  
       5. 2. 2. 286 おもての樂旨 3  
       5. 2. 2. 287 おもての樂旨 3  
       5. 2. 2. 288 おもての樂旨 3  
       5. 2. 2. 289 おもての樂旨 3  
       5. 2. 2. 290 おもての樂旨 3  
       5. 2. 2. 291 おもての樂旨 3  
       5. 2. 2. 292 おもての樂旨 3  
       5. 2. 2. 293 おもての樂旨 3  
       5. 2. 2. 294 おもての樂旨 3  
       5. 2. 2. 295 おもての樂旨 3  
       5. 2. 2. 296 おもての樂旨 3  
       5. 2. 2. 297 おもての樂旨 3  
       5. 2. 2. 298 おもての樂旨 3  
       5. 2. 2. 299 おもての樂旨 3  
       5. 2. 2. 300 おもての樂旨 3  
       5. 2. 2. 301 おもての樂旨 3  
       5. 2. 2. 302 おもての樂旨 3  
       5. 2. 2. 303 おもての樂旨 3  
       5. 2. 2. 304 おもての樂旨 3  
       5. 2. 2. 305 おもての樂旨 3  
       5. 2. 2. 306 おもての樂旨 3  
       5. 2. 2. 307 おもての樂旨 3  
       5. 2. 2. 308 おもての樂旨 3  
       5. 2. 2. 309 おもての樂旨 3  
       5. 2. 2. 310 おもての樂旨 3  
       5. 2. 2. 311 おもての樂旨 3  
       5. 2. 2. 312 おもての樂旨 3  
       5. 2. 2. 313 おもての樂旨 3  
       5. 2. 2. 314 おもての樂旨 3  
       5. 2. 2. 315 おもての樂旨 3  
       5. 2. 2. 316 おもての樂旨 3  
       5. 2. 2. 317 おもての樂旨 3  
       5. 2. 2. 318 おもての樂旨 3  
       5. 2. 2. 319 おもての樂旨 3  
       5. 2. 2. 320 おもての樂旨 3  
       5. 2. 2. 321 おもての樂旨 3  
       5. 2. 2. 322 おもての樂旨 3  
       5. 2. 2. 323 おもての樂旨 3  
       5. 2. 2. 324 おもての樂旨 3  
       5. 2. 2. 325 おもての樂旨 3  
       5. 2. 2. 326 おもての樂旨 3  
       5. 2. 2. 327 おもての樂旨 3  
       5. 2. 2. 328 おもての樂旨 3  
       5. 2. 2. 329 おもての樂旨 3  
       5. 2. 2. 330 おもての樂旨 3  
       5. 2. 2. 331 おもての樂旨 3  
       5. 2. 2. 332 おもての樂旨 3  
       5. 2. 2. 333 おもての樂旨 3  
       5. 2. 2. 334 おもての樂旨 3  
       5. 2. 2. 335 おもての樂旨 3  
       5. 2. 2. 336 おもての樂旨 3  
       5. 2. 2. 337 おもての樂旨 3  
       5. 2. 2. 338 おもての樂旨 3  
       5. 2. 2. 339 おもての樂旨 3  
       5. 2. 2. 340 おもての樂旨 3  
       5. 2. 2. 341 おもての樂旨 3  
       5. 2. 2. 342 おもての樂旨 3  
       5. 2. 2. 343 おもての樂旨 3  
       5. 2. 2. 344 おもての樂旨 3  
       5. 2. 2. 345 おもての樂旨 3  
       5. 2. 2. 346 おもての樂旨 3  
       5. 2. 2. 347 おもての樂旨 3  
       5. 2. 2. 348 おもての樂旨 3  
       5. 2. 2. 349 おもての樂旨 3  
       5. 2. 2. 350 おもての樂旨 3  
       5. 2. 2. 351 おもての樂旨 3  
       5. 2. 2. 352 おもての樂旨 3  
       5. 2. 2

#### IV. 空性の体得が解脱への唯一の道

##### 1. 教説

1. 1 問題提起と大乗經典による回答 (ver. 41)

詩頌 42512-43003

1. 2 大乗非仏説をめぐる対論 (vers. 42-44)

詩頌 43004-43507

##### 2. 論理

2. 1 空性がなければ比丘たることと涅槃はありえない (ver. 45)

詩頌 43508-43808

2. 2 比丘たることの確立 (vers. 46-48ab)

詩頌 43809-44105

2. 3 涅槃の確立 (vers. 48cd-49)

詩頌 44105-44310

2. 4 詩頌 50-52 は他者による挿入 (vers. 50-52)

詩頌 44311-44407

3. 空性に対する恐怖の不合理性

3. 1 問題提起 (ver. 53)

詩頌 44408-44613

3. 2 回答 一切の觀は根本原質であると語る根拠闘議論の説明 (44614-44815)

3. 2. 1 空性の修習による利益 (vers. 54-56)

詩頌 44614-44815

3. 2. 2 恐怖の主体である自我の非存在 (vers. 57)

詩頌 44815-44912

#### V. 自我説への批判

1. 身体は自我ではない (vers. 58-60)

詩頌 44913-45206

2. 知は自我ではない (サンキヤ学派、ミーマーンサー学派、

ヴェーダーンタ学派との対論) (vers. 61-68)

詩頌 45207-46508

3. 非知的なものは自我ではない (ニヤーヤ学派、

ヴァイシェーシカ学派などの対論) (vers. 69-70)

詩頌 46509-46715

4. 無我説と因果関係の成立

4. 1 問題提起 (ver. 71)

詩頌 46716-46912

4. 2 回答 (vers. 72-73)

詩頌 46913-48413

5. 三時にある心は自我ではない (ver. 74)

詩頌 48414-48514

6. 結論：自我は存在しない (ver. 75)

詩頌 48515-48603

7. 傍論：二種の迷妄と無我性の修習

7. 1 目的のための迷妄の許容 (vers. 76-77)

詩頌 48604-49016

7. 2 自我に関する迷妄の不許容 (ver. 78)

詩頌 49017-49315

#### VI. 四つの念想法

1. 身体の非実在性 (vers. 79-88)

詩頌 49316-51102

2. 感受の非実在性 (vers. 89-102)

詩頌 51103-52313

3. 心の非実在性 (vers. 103-106ab)

詩頌 52314-52704

#### 4. 事物の非実在性

4. 1 事物は不生（不滅）である（ver. 106cd） 52705-52816

#### 4. 2 傍論

4. 2. 1 「世俗諦はありえない」ことについて（vers. 107-108） 52901-53316

4. 2. 2 「考察はありえない」ことについて（vers. 109-116） 53316-54007

#### 4. 3 『中論』の四不生の立証

##### 4. 3. 1 無因生の否定

4. 3. 1. 1 自然論者との対論（vers. 117-118） 54008-54405

4. 3. 1. 2 有神論者との対論（vers. 119-126） 54406-55916

4. 3. 1. 3 原子論者との対論（ver. 127ab） 55917-56003

4. 3. 1. 4 根本原質論者との対論（vers. 127cd-138） 56004-57101

4. 3. 1. 5 傍論：世俗的な認識手段による空性の考察の真偽性

（vers. 139-141） 57101-57313

4. 3. 1. 6 結論：ものは無因から生じない（ver. 142ab） 57314-57403

4. 3. 2 自生、他生、共生の否定（ver. 142cd） 57403-57918

##### 4. 4 原因から生じたものは不生不滅である

4. 4. 1 三世実有説による生起説への批判（ver. 143ab） 57919-58204

4. 4. 2 原因から生じたものは幻等と等しい（vers. 143cd-145） 58205-58320

4. 4. 3 原因によって何物も生じない（vers. 146-150） 58401-58908

4. 5 諸趣等の差異は実在ではない（ver. 151） 58909-59015

#### VII. 結び：勝義真理を知らない者たちの執着や苦痛の考察および彼等への祈願

1. 执着、苦痛への考察（vers. 152-166） 59016-60217

2. 祈願と廻向

2. 1 作者による祈願（vers. 167-168） 60218-60410

2. 2 注釈者による廻向